

山手線はスリ師の梁山泊として知られている。

『二番線に電車が参ります ご利用の方は白線の内側にさがってお待ちください』

転落予防の注意を喚起するアナウンスがホームに響く。

山手線といえは今さら説明するまでもない都民にとつては身近な路線、東京の内側に円を描くように敷設された環状線。山手線の呼称が示す区間には品川、大崎、五反田、目黒、恵比寿、池袋以下略が含まれる。通勤通学の時間帯を中心にビジネス需要と生活需要に応え、一日数万から数十万が利用する大所帯だ。

昼にはまだ少し早い頃合、車内にはサラリーマンだろうスーツ姿の男性やカジュアルな服装の学生が目立つ。天井から鈴なりにぶらさがる吊り革を掴んだ彼らは、それぞれ音楽を聴いたり新聞を読んだり目的地まで漫然と時間を潰す。

過半数の人間にとつて山手線は目的地に行くための交通手段のひとつ、たんなる通過点でしかないが、車両を仕事場にしている人間も少数ながら存在する。

羽生もその一人だった。

新宿駅から乗り込み三周目、周囲の状況を的確かつ正確に把握し、いよいよ行動を開始する。

見た目はごく普通の二十代後半男性。

シャツとスラックスの私服を着くずしたどこかやる気のない姿は、就職活動を凍結しバイトで食い繋ぐうちに三十路が押し迫ったフリーターに見える。

羽生は山手線を縄張りにするスリ師だ。

山手線はスリの聖域、腕前に自信もつ猛者どもが割拠する梁山泊。

二十七と年こそ若い、その腕前は同業者のあいだでも抜きん出て一目おかれ、若造とばかにされないだけのテクと実績がある。

中坊の頃から手癖が悪く、もともと家が貧乏で遊ぶ金など

もらえず小遣い稼ぎと憂さ晴らしを兼ねて山手線に乗って財布をスツていたため、スリ歴十二年にもなるこの道のベテランだ。

獲物に一切の痛痒感じさせず財布をスる手腕は同業者の間でも語り草となり、羽生の名字にひっかけて「山手のハブ」の異名を頂戴している。本人、いまだきハブかよそのセンスなしだぜと内心忸怩たるものを感じないではないが、異名に異議申し立てるのも恥ずかしいので呼びたいやつには勝手に呼ばせている。

吊り革を掴み眠たげにあくびする学生とスポーツ新聞を器用に折りたたんで読むサラリーマンの間をくぐり、目的の人物へ接近。

本日、羽生が狙いをつけたのは企業の重役風の中年男性。

仕立てのよいダークグレイの背広を着こなし、漆黒の光沢放つ靴をはく。

日本人の体型に従来の既製品は似合わない。

なで肩寸胴短足だとうしても着られてる感が先にたってしまうが、男のスーツはきちんと寸法をとったオーダーメイド仕立てで即ち経済的に余裕がある証拠。靴も高そうだ。

心の中で舌なめずり、つまさきからてっぺんまでじっくり観察。

吊り革を掴みさりげなく隣に寄り添う。

男は羽生の接近に注意を払わず熱心に経済新聞を読んでいる。昨今の不況を憂えているのだろう。

車内はおよそ八割の入り。スリ師にとつて最高の状況だ。これより人が多く混んでいても少なくともやりにくい。前者は過密して身動きできず、後者はバレる危険が高まる。懐に手が届くほど近寄っても不自然に思われぬ距離というのは実に按配がむずかしい。

『次は田町、次は田町。お降りのお客様は電車がとまるまでお待ちください』

定例のアナウンスが響き、ドア付近に下車予定の乗客が移

動する。

羽生は慎重を期して距離を縮める。

指先がちりちり疼く。

慌てるな、冷静に、沈着さを保て。

目を閉じ、呼吸を整え、神経を鋭敏に研ぎ澄ませる。

眼光鋭くえものの横顔をうかがう。

だいじようぶ、気付いてない。

あたりまえだ、この俺が素人に気付かれるような凡ミスをするか。

経験と実践を踏み鍛え上げた己のスキルとテクに、羽生は傲慢なほどの自信をもっている。

俺はプロだ、素人に気取られるようなミスは万が一にもおかさない。

一方で油断は禁物と、己の増長を戒める。

何が引き金で気付かれるかわからない。異様に勘の鋭い人間というのはたしかに何割かの確率で存在し、運悪くそんなヤツに当たってしまったら……

輝かしい栄光と伝説に彩られたスリ人生に終止符が打たれる。

さあ本番だ。

気を引き締め、勝負に打って出る。やみつきになる高揚感

に合わせ指先がぴりりと放電する。

男の財布は……

口元に薄く笑みが浮かぶ。

観察の結果、重役は背広の内ポケットに財布をしまつてると確信した。

尻ポケットや胸ポケットに無造作かつ無防備に突っ込んで人間とは違い、ガードが固い。

表から見えない隠し場所は几帳面な性格に加え高額紙幣の所持を裏つける。

俺の目と勘に狂いはない。

予測があたつてほくそえむ。

スリ師の本懐は大物一本釣り、相手に不足はない。重役の隣に立つ。内ポケットを狙いつつ、タイミングを計る。

羽生の予想が正しければそろそろ……

ブレーキ。

慣性につられ、シートに座る人間も吊り革をもつ人間も一齐によろめく。

獲物との距離が極端に近付いた一刹那を逃さず、手首を撓らせ一閃。

スリ師にとつて指とは高性能センサーとバランサーを兼ねる、もつとも信頼おける仕事道具である。

臉に浮かぶのはえものの喉笛に鋭い牙立て食らいつく獯猛なハブのイメージ。

やる気なげな表情が勝負に挑むその一瞬引き締まり、ハブのイメージと重ねた右手を解き放ち、よろめき捲れた男の背広から本革の札入れを抜き取る。

所要時間 0・08秒。

これぞ山手の羽生と仲間恐れられ尊敬を受ける理由。

無気力に脇にたられられた右手はその一瞬完全に覚醒し、一瞬みで致命傷を与える毒牙もつハブと化しえものに襲いかかる。

事が済み体から殺気が抜ける。

さあ、あとは札を抜き取って返せば終わり……

ドアが開き、途端、大勢の人間が乗り込んでくる。

何かのイベントがあつたのだろうか、こぞつて乗り込んできた人なみに埋もれた羽生を寒気が襲う。

「!？」

禍々しい気は。

たとえるならそう、ハブと互角に渡り合うマングース。

ハブにも決して引けを取らぬ戦闘力を有する獯猛な生き物の気配がびたりと背にはりつき、首筋を冷や汗が伝う。

紙幣を抜き取り返そうとした手を、咄嗟の判断で体の前に持つていき、ズボンに札入れごと突っ込む。

羽生は動揺していた。

なにか、得体の知れぬものが後ろにいる。

背中に被さる凄まじい重圧は、振り向くのに抵抗を感じさせる。

札入れを返さなかつたのは致命的なミス、もしまだ車両にいるうちに重役が財布の消失に気付いたら面倒なことになる。おそらく最も近くの羽生に疑惑がかけられるだろう。

ズボンから札入れが見つかったらおしまいだ。

一体いま、この車両に「何」がいる？

何百という財布をスリ修羅場をくぐり鍛え上げた勘が、こいつはただものじゃないとけたたましく警報を鳴らす。

人に紛れて人にあらず、禍々しく邪悪な気のぬしは……

ひたり。

臀部に違和感。

「っ、」

振り向き、顔を確かめたい衝動を必死で堪え平常心を保つ。後ろに寄り添う気配は次第に濃さを増していく。

羽生は目下売り出し中のスリ師だ。

が、広く顔を知られてるわけではない。

山手のハブの名こそスリ師仲間のあいだを一人歩きしてるが、なあなあ我こそはと喧伝して歩いてるわけじゃなし、偶然乗り合わせた同業者がそうと知らず羽生の財布をねらう可能性だつて十分にある。

しかし……………

(……………どうも素人くせえな、こいつは)

痒いところに届かず迂回するもどかしい手つきにいらつく。スリ師がなにより重視するのは速さだ。

このスリはやけに手際が悪く、いたずらに羽生の尻をなでまわすばかりで一向に本体に手をかけようとしないのだ。羽生の財布はズボンの横ポケットに入ってる。

さわればすぐ気付くはずだが……………

商売を始めて間もない青二才か？

そう結論づけ微笑ましさを抱く。

羽生は少々天邪鬼ではねつかえりのきらいがあるが、後輩には寛大だ。くわえて、今日は懐が温かい。少しくらいは大目に……………

……………さわさわ。

大目に。

「……………？」

変だ。

いつまでたつても手が離れない。しつこく尻をさわっている。

しかもその触り方というのが財布をねらつてるとい感じじゃなく、なんとなくか、激しくアレであれなのだ。

尻をさわること自体が目的のような粘着な執拗さ。

まさか。

ひとつの可能性が浮かぶも、自分の性別を考え即座に否定する。

そんなおぞましい事態は冗談でも考えたくない。

吊り革を掴む手がじつとり汗ばみ、動悸が激しくなる。

勘違いだ。そうに決まってる。

今後ろにいるのはちよつとドジでのろまでお茶目な素人スリ師、尻をなでまくってるのは財布の場所がわからないから……

「うう………」

ついに痺れを切らし、尖った声で牽制する。

「—お前、いい加減に」

「スリがいるってバラしますよ」

成熟した声が囁く。

衝撃の落雷が鞭打つ。

「な」

声だけなら魅力的といつていいだろうが、位置関係からしてこの男が犯人に間違いない。

さつきからしつこく羽生の尻をさわり続ける犯人。

バレた。

見つかつた。

見られてた？ いつから？

蚊トンプボの如く脳裏に荒れ狂う疑問符。

生唾を飲み、抑制の働く言葉を返す。

「………なんのことだよ」

「とぼけるおつもりですか」

声には面白がるふうな響きがあった。

そいつはちよつど羽生の真後ろ、背中につく位置に陣取っている。

背が高い。振り向かなくてもわかる。

視界にちらつく濃紺のスーツと曇りひとつなく磨き抜いた革靴の取り合わせは潔癖さを強調する。

靴裏から一定の振動が伝わる。

数千数百の人間を満載した電車は、一定の振動を維持し周回軌道に乗る。

追い詰められつつある緊張をごまかすため、周囲に視線を飛ばす。

シートで文庫を読む〇し、退屈そうに枝毛をいじるギャル、携帯でメールを打つ学生……平穏平和な日常の延長の光景。

「……あの人から財布をスツたでしょう」

「はあ？ まさか俺をスリだと疑ってるのか？ 誰だよあんな、失礼だぞ」

「その若さで相当な場数を踏んでるとお察しします」

「大した妄想癖だ。秋葉原から乗ったのか？」

そいつは羽生の皮肉を不敵に笑って受け流す。

好奇心に負け、ぎこちなく振り返る。

羽生の背にびたり密着するのは長身の男。

セルフレームの眼鏡が似合う鋭角的な顔立ち、神経質に尖った顎と細い鼻梁、口元に漂うシャイな笑み。没個性が美德であるようなスーツはさながらエリート公務員の印象。品行方正と人畜無害を掛け合わせたような見えてくれは「実直そうな」「誠実そうな」という好感度の高い枕詞に結びつく。

実直そうで、誠実そうな、痴漢。
違和感ばりばりだ。

「いきなりなんだあんた。とりあえず俺のケツから手えどけてくれ、男にさわられて悦ぶ趣味ないんでね」

「落ち着いて。声をおとして……僭越ながら、まわりに聞かれてはあなたに不利益をもたらします」

伶俐な知性を加味する眼鏡越し、一重の双眸を眇めて警告口を嚙む。悔しいが、そのとおりだ。

「ご理解いただけて恐縮です」

言葉遣いこそ丁寧だがかえって小馬鹿にされてるようで不愉快だ。

電車は揺れる。吊り革も人も揺れる。

男の手はますますもって大胆さを増し、腰から臀部にかけねっとり円を描くようになでまわす。

もはや誤解しようがない。

男の手は下心を隠しもしない、どころか全開だ。

「……………痴漢か」

マナーとして一応確認をとる。

「はい」

一体なんだ、これはどういう状況だ、どうして俺は痴漢されてるんだ？